

【保育実践論文(ソニー幼児教育支援プログラム) 審査講評】**2019年度 最優秀園
京都市立中京もえぎ幼稚園**

本園は、2009年度から継続して本論文主題「科学する心を育てる」に取り組み、子どもたちの成長を着実に捉えて積み重ねてきた成果を基に、本年度は新たな視点として、子どもの“ねがい”に注目し、園が一つになって、熱心に研究を深化されました。

また、昨年度の研究から、5歳児の子どもたちが、「予想や予測」をもって遊び始めることが明らかにされましたが、それは“ねがい”をもつから、生まれるとの仮説をもたれました。さらに、子どもの心にある“ねがい”を読み取るために、保育者が、子どもの“ねがい”から始まる遊びの過程を、時系列で表す図を、独自に創り出されました。この図式化により、子どもの「予想や予測」に焦点を当て、この心の動きと行動が変化する外的な要因・原因をも明確に示した、深遠な読み取りにつながっています。

個別の言動を把握された詳細な記録からは、同じ活動の場であっても、子ども一人一人の“ねがい”の違いに注視していることが分かります。また、“ねがい”から「予想・予測」を経て、発見・確信・気づき・成功などに至る過程を、園全体で協働的に探究を進めたことが伝わってきました。

また保育者は、子どもたちの“ねがい”に寄り添うために、教材研究を重ねています。加えて、子どもが「予想・予測」したことを繰り返し試せる場の設定、日々、船を進化させていった過程の写真の掲示、子ども同士の遊びの振り返りの場などのきめ細やかな環境の創意工夫が、子どもたちの“ねがい”を広げたり、高めたりしています。

このような環境を子どもたちが使いこなし、“ねがい”をもって豊かな体験を重ねている姿には、3歳児、4歳児、5歳児それぞれに特徴的で確かな「科学する心」が育っているのがわかります。

5歳児の事例では、ねがいをもった子どもたちが、予想と予測から失敗、葛藤、困難と出合うことで新たな“ねがい”が生まれ、友達と共に試行錯誤した結果、物の特性や物事の法則性も見出していく過程に、この時期の探究心や思考力の育ちが鮮明にみえてきます。

これらの、子ども理解を踏まえた保育者の援助と環境構成・再構成の工夫による保育の深耕は、他園のたいへん参考になる取り組みとして、高く評価されました。

今後も、これらの成果を基に、本園が子どもたちに「科学する心」を育む独自性ある実践を積み重ね、さらなる保育の質の向上につながることを願っております。